

武蔵野日曜講筵

安息日

――マルコ伝第2章23節～3章6節――

1977年11月13日

小池辰雄

エホバの安息 贖い出し ヨベルの年 安息日の主 偽善者 絶対なるものは神のもの キリストの中に安らつ

【マルコ2・23～3・6】

23 イエス安息日^{あんそくじつ}に麦畑をとおり給いしに、弟子たち歩みつつ穂を摘み始め
たれば、24 パリサイ人^{びと}、イエスに言う『視よ、彼らは何ゆえ安息日^すに為まじ
き事をするか』25 答え給う『ダビデその伴える人々と共に乏しくして飢えし
とき^な為しし事を未だ読まぬか。26 即ち大祭司アビアタルの時、ダビデ神の家
に入りて、祭司のほかは食うまじき^{くら}供のパンを取りて食い、おのれと偕なる
者にも与えたり』27 また言いたもう『安息日は人のために設けられて、人は
安息日のために設けられず。28 然れば人の子は安息日にも主たるなり』

1 また会堂に入り給いしに、片手なえたる人あり。2 人々イエスを訴えんと
思いて、安息日にかの人を医すや否やと窺う^{うかが}。3 イエス手なえたる人に『中
に立て』といい、4 また人々に言いたもう『安息日に善をなすと惡をなすと、
生命を救うと殺すと、いずれかよき』彼ら默然^{もくねん}たり。5 イエスその心の頑固^{かたくな}
なるを憂いて、怒り見回して、手なえたる人に『手を伸べよ』^のと言ひ給う。
かれ手を伸べたれば癒ゆ。6 パリサイ人いでて、直ちにヘロデ党の人とともに、
如何^{いか}にしてかイエスを亡ぼさんと議^{はか}る。

●エホバの安息

23 イエス安息日^{あんそくじつ}に麦畑をとおり給いしに、弟子たち歩みつつ穂を摘み始め
たれば、

他人^{ひと}のところの畑の穂を摘んでいるわけですね。

24 パリサイ人^{びと}、イエスに言う『視よ、彼らは何ゆえ安息日^すに為まじき事をす
るか』

パリサイ人の問らしいわけですが、そうすると、キリストが、

25 答え給う『ダビデその伴える人々と共に乏しくして飢えしとき^な為しし事を



未だ読まぬか。²⁶即ち大祭司アビアタルの時、ダビデ神の家に入りて、祭司のほかは食^{くら}うまじき^{そなえ}供のパンを取りて食い、おのれと偕なる者にも与えたり』と。そうあるじゃないかと。

²⁷また言いたもう『安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設けられず。²⁸然れば人の子は安息日にも主たるなり』[』]こんなことを仰るものだから、反ユダヤ教ということで、睨^{にら}まれたわけです。

そこで、旧約における

「安息日」
あんそくじつ

を多少見てみなくてはならないんですが、「安息」という言葉はヘブライ語では「シャバット」といいます。「安らう」という字です。これは動詞です。これが名詞になって「安息日」ということになる、

「シャバート」

となる。「安息日」のことは、ご承知のとおり、申命記の5章、出エジプト記20章に書いてある。まだその他にたくさんあります。

「⁸安息日を憶^{おも}えてこれを聖潔^{きよく}すべし。⁹六日の間^{むいか}勞^{はたら}きて汝の一切の業^{わざ}を為すべし。¹⁰七日は汝の神エホバの安息なれば何の業務^{むぎ}をも為すべからず」(出エジプト20・8～10)

ここの出エジプト記のところは「P」の記事ですね。ちゃんと祭司、^{よそぐに}祭司的な角度から言われています。

「汝も汝の息子^{むすこ}息女^{むすめ}も汝の僕婢^{しもべしもめ}も汝の家畜も汝の門の中における他^{よそぐに}国の人も然^{なり}り。¹¹其はエホバ六日の中に天と地と海とそれらの中の一切^{すべて}の物を作りて第七日に息^{なぬかめ}みたればなり。¹²是をもてエホバ安息日を祝^{ここ}いて聖日としたもう」(出エジプト20・10～11)

まあ、非常にはつきりと書いてある。天地創造の神話、創世記1章。これは「P」によっている「祭司典」です。

六日でもって天地を創造し、完成する。しかし、天地創造の神話といいますが、正に然らんとされる順序で神さまの創造ができてくることは大したもんです。神さまの一日は何年だか分からない。要するに、一日、二日、三日と数えた。ちょうど七日目――ヘブライ語で「七」という字は

「シェバツハ」

という。ちょっと似ている――しかし、この「七」という字からきたのではなくて、偶然に「七」という字と「安息」という字が語呂合わせみたいに似ているわけです。



● 贖い出し

レビ記23章1節、

「エホバ、モーセに告げて言いたまわく、²イスラエルの子孫^{ひとびと}につけて之に言え、汝らが宣告^{ふれ}て聖会となすべきエホバの節期^{せつき}は是^{かく}のごとし我が節期はすなわち是なり。³六日の間業務^{わざ}をなすべし、第七日^{なぬかめ}は休むべき安息日にして聖会なり。汝ら何の業^{わざ}をもなすべからず。是は汝らがその一切^{すべて}の住所^{すみか}において守るべきエホバの安息日なり」(レビ23・1～3)

とある。また、レビ記23章32節、

「³²是は汝らの休むべき安息日なり、汝らその身をなやますべし、またその月の九日の晩すなわちその晩より翌晩まで汝等その安息をまもるべし」(レビ記

23・32)

これは「贖罪の日」のことから書いてあったな。

「七月十日は贖罪の日にして汝らにおいて聖会たり」(レビ23・27)

「贖罪」

という言葉は歴史的にいうと、

「出エジプト」

からです。イスラエルの人たちがエジプトでもって半奴隷状態で苦しんでいた。それから救い出したことを、

「贖い出す」

と言っているんです。その時に、いわゆる

「過越^{すぎこし}」

のことがあったでしょ。

「イスラエルの人たちは門の所に、羊をほふってその血を塗っておけ。そうすれば初子^{ういご}を殺さないで過越^{ういご}すぞ。その前を過越^{ういご}すぞ」

と、妙なことが書いてあります。

「エジプトのやつは、そういうことをしないものだから殺されてしまった。お前たちはそれで羊の血によつて救いを得た」

と。

「贖罪の血」

というのは、もともとそこからくるんです。出エジプト自体が、イスラエルが贖い出された。そういうところから、困難からの救い出しがもともと「贖い」です。それから、バビロニアから出る時は、今度は罪からの贖いになる。

不信の罪からの贖い出しが「出バビロニア」であつて、困難からの贖い出しが「出エジプト」である。この大きな歴史的な二つの事実。これが「贖い」という言葉の事実的背景なんです。



ですから、安息は、

「神さまが業を休まれた」

という意味と、

「イスラエルは贖い出されたんだから、それを憶えて安め、なやますな」

と、そういう二つの意味が歴史的に、安息の意味にはあるんです。

●ヨベルの年

レビ記25章1節から、

「エホバ、シナイ山にてモーセに告げて言いたまわく

出エジプトしてからシナイ半島に行きましたね、

2 イスラエルの子孫につけて之に言うべし、我が汝らに与うる地に汝ら至らん時はその地にもエホバにむかいて安息を守らしむべし。3 六年のあいだ汝

その田野に種播きまた六年のあいだ汝その菓園の物を剪伐てその果をあつむべし。4 然ど第七年には地に安息をなさしむべし。是エホバにむかいてす

る安息なり。汝その田野に種播くべからず。またその菓園の物を剪伐むべ

からず」(レビ25・1～4)

だから、安息は

「七日目と七年目」

という二つの意味をもっています。これは非常に神の業に関係している。人間の労働はそういう意味において、安息日は、ただくたびれたから休むというのではなくて、祝福されるわけです。

「神さまを憶えて祝福にあずかる」

というのがこの安息の本来の意味です。それが派生した意味では、七日目くらいがちょうど休むのにいいという近代的な人間本位の考え方が出てきますけれども。しかし、その元は神の業に基づいた。だから、人間の労働にもそれが派生してきて、祝福されるということです。

「汝安息の年を七次かぞうべし是すなわち七年を七回かぞうるなり。安息の年七次の間はすなわち四十九年なり。9 七月の十日になんじ喇叭の声を鳴りわたらしむべし即ち贖罪の日になんじら国の中にあまねく喇叭を吹きならさしめ、10 かくしてその第五十年を聖め国中の一切の人民に自由を宣しめすべし。この年はなんじらにはヨベルの年なり。」(レビ25・8～10)

これは大事な言葉ですよ、

「ヨベル」

というのは「歓喜、喜び」という字です。



こういう「七日目と七年目」、それが本来神さまの安息から発している。また、出エジプトという救いから発しているということが、この安息の祝福の意味なんです。だから、神の中に安らう。ただボヤツと安らうのではないんです、安息は。神に祝福されるんだから、神の中に安らう。

「私は神の中に安らう」

ということ。これは今度は福音的になる。註解書で私はそういうように読んだことはない。今、私が言うだけのはなしです。「神の中に安らう」ことが本当の安息です。

レビ記だの出エジプト記にはよく安息のことが出てますから。

●安息日の主

マルコ伝に戻ります。

25 答え給う『ダビデその伴える人々と共に乏しくして飢えしとき^な為しし事を未だ読まぬか。26 即ち大祭司アビアタルの時、ダビデ神の家に入りて、祭司のほかは食^{くら}うまじき^{そなえ}供のパンを取りて食い、おのれと偕なる者にも与えたり』
ダビデがこんなことをしたと。これは一体どこに書いてあるかというと、サムエル前書の21章6節、

「6 祭司かれに聖きパンを与えたり

ダビデにね、

そはかしこに^{そなえ}供前のパンの外はパンなかりければなり。即ちそのパンは^{さげ}下る日に熱きパンをささげんとて之をエホバのまえより取りされるなり。」(サムエル前書21・6)

そういう祭司のパンを与えたところじゃないかと。だから、麦畑で取ったつて悪くはないんだと、大分乱暴な言い方です。キリストは相当、共有的な気持をもっていらいっしやる。

「安息日は人のためなので、人が安息日のためにあるのではない」

と。ここらも旧約における安息の本来の意味からちよつとはずれたようなことを言っておられる。しかし、それは文字づらの意味であつて、もう一つ奥はそうじゃないけれども、だから、

「人の子即ちキリスト、私も安息日は主である。だから、人の子に限らない。キリスト者はみんな安息日の主だ」

と。これはちよつと躓きの言葉ですね。

●偽善者

マルコ伝3章に入ります。

1 また会堂に入り給いしに、片手なえたる人あり。2 人々イエスを訴えんと



思いて、安息日にかの人を医すや否やと窺う。

罾^{わな}をかけるようなことを言うわけだ。「人々」といったって、パリサイ派のやつだ。

3 イエス手なえたる人に『中に立て』といい、

彼らがどう思っているか、キリストは人の心の中が読めますから、いろんなことを言いたがるやつらの真ん中に立たせてしまった。

4 また人々に言いたもう『安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救うと殺

すと、いずれかよき』

今度は逆に、反問したわけだ。問い返した。ところが、パリサイ連中は答えられない。

彼ら黙然たり。

黙秘権を使ってしまった。

5 イエスその心の頑固^{かたくな}なるを憂いて、怒り見回して、

キリストも憤然としてしまったわけです。キリストはそういった偽善者に対しては憤られる。躓いたり転んだりして罪を犯す者をキリストは救おうとなさるけれども、己をよしとして言い張るような自己義認者に対しては、キリストは怒るんです。

だから、いわゆる学者・パリサイ人に対して、キリストはマタイ伝23章にも、

「禍害^{わざわい}なるかな、偽善なる学者、パリサイ人よ」

と鋭く言っておられるでしょ。

「偽善」とは、己を義^よしとすることがキリストにとっては偽善なんです。これは普通の概

念よりももうひとつ強い。

「それでは困るではないか。正しいと思つてなぜ悪いか」

と普通は思うでしょ。正しいのは、その事柄が正しいので、自分が正しいのではない。人間そのものは、そう思う事態においてそれは正しいかも知れないけれども、どこまでも真理の前に平伏しの氣持でないと自己主張になるから、キリストはこれを偽善と言われた。パウロがそうだったんです。パウロはなるほど

「律法の義につきては責むべきところなし」

と、律法をちゃんと外側から守つて、また一生懸命守っていると思つていた。その義においては、自分は責むべきところなし。即ち、ユダヤ教において自分は熱心であつたと。主觀的に熱心なんですよ、正直。そうして、見たところ確かに立派なんです。道徳的、宗教的であるんです。けれども、そのように、そういう角度から自己を肯定していることがキリストにとっては「偽善」というんです。困つたね。

●絶対なるものは神のもの

だから、宗派根性は偽善だよ。相对主義の中ではダメなんです、この福音の世界は。それぞれの主義主張には真理性がありますよ。けれども、それを主張して他を排斥するところ



ろが間違っている。その限りにおいては確かに正しいことはある。しかし、他の在り方もいろいろあり得る。絶対なんていうものはありはしない。問題はそこにある何が絶対か。絶対なるものは神のものですから、どれも。相対の姿において何か間違っていることがあれば、それは相対における相対的な間違いということはお互いに指摘することはできるでしょう。けれども、その間違いを絶対的な角度から間違いと言い切るようなことをするから、それはいかん。分かりますか。

我々は相対的な在り方の中にありながら、

「絶対的なものがそこにあるか」

ということ。その中に本当のもののさえあれば、

「なるほどあそこには本ものがある。あの在り方はあんまり感心しないけれども結構でございます」

と。お互いに忍び、赦し、認めあう。

パウロはそうようにして、

「偽善なる学者、パリサイ人」

とキリストが言われるその偽善が分かったわけです。だから、今まで自分が正しいと思つたことを

「塵芥の如く」
ちりあくた

彼は棄てた。

「大間違いだった。自己主張していたな、私は」と。

キリスト自身が己を善しとしなかったではないですか。キリストは世界で第一人者です、道徳的に言おうが、宗教的に言おうが、それが

「神さまのほかに善いものはない」

と言ったではないですか、キリストが。キリストはいわゆる自己義認を徹底的にしなかった。「神さまだけだ。100%は神に。自分はゼロだ」

と。これが偽善でないということです。そうすると、本当の義ただしさがそこに来るんです。神的な神の義が来る。人間の義ではない。これは普通の道徳の世界では、これが言えない。これが——ただ道徳の世界を棄てるんじゃない——本当に満たすんです。満たして、もうその世界にこだわるということがないということです。

●キリストの中に安らう

5 イエスその心の頑固かたくななるを憂いて、怒り見回して、手なえたる人に『手を伸べよ』^のと言い給う。かれ手を伸べたれば癒ゆ。

「わが言は靈なり生命なり」



という。正にその通りです。キリストが安息日に生命を救う。これに氣をつけてください。
4節、

4 また人々に言いたもう『安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救うと殺すと、いずれかよき』

善をなし、生命を救う。私たちはキリストという至高善、最高の善なるキリストを受けとる。また、生命なるキリストを受けとる。私たちが安息日を神の中に安らうとは、このキリストの中に安らって、キリストという善の善なるもの、美の美なるもの、真の真なるもの――真・善・美だよ、キリストは。だから、私は無限無量と言っんです――これを受けとる。

「我は道なり、生命なり、真理なり」

という。我々はキリストという真理、生命を受けとるんです。

我々はなぜ集会を守っているかという、守らんがために守っているのではない。安息日は、私たちは神さまの中に安らわざるを得ない。キリストの力に与^{あず}からざるを得ない。だから、安息日に力を得るんです、我々は。六日間の原動力がこの七日目の安息日です。

ユダヤ人にとっては、金曜日の夕方から土曜日の夕方が安息日です。女の人は煮炊きもしない。電車も汽車も止まってしまう。今でも相変わらずそうだ。

キリストは金曜日に十字架にかかった。そして三日目、日曜日の朝、復活された。復活の力、靈的な力をもってキリストが日曜日の朝に立ち上がった。そして、靈的な力で岩盤を蹴飛ばしてしまった。キリスト教徒にとっては、日曜日はもの凄いキリストの生命の現象している日、現れた日です。この日にキリストの中に入って力を得ないで、何が日曜、何が安息日、何が聖書礼拝だということです。いいですね。

この日曜日の力、生命、これは知情意の一切に対して力が入ってくる。キリストを頂いた私たちは、安息日によきことが自ずから成されていく。人に福音を伝えざるを得ない。そして、聖書を本当に身読すればするほど力が出てくる。だから、守らざるを得ない。一緒に礼拝せざるを得ない。その意味において私たちは、安息日というものを旧約の精神をもつと新約の角度から、キリストの角度からこれを満たしていく。だから楽しい。甦りの力を頂く日です。

